7　品質基準書

基礎工事

新潟地域型住宅協議会
ネイティブハウス

部位	基礎	No	1

基準

基礎の寸法、構造は構造計算書のとおりとする。長期認定申請図と実施図の相違を確認する。

計算書において、フックが「あり」になっているか、「なし」になっているか確認してください。「なしとする場合は、構造計算による確認が必要です。

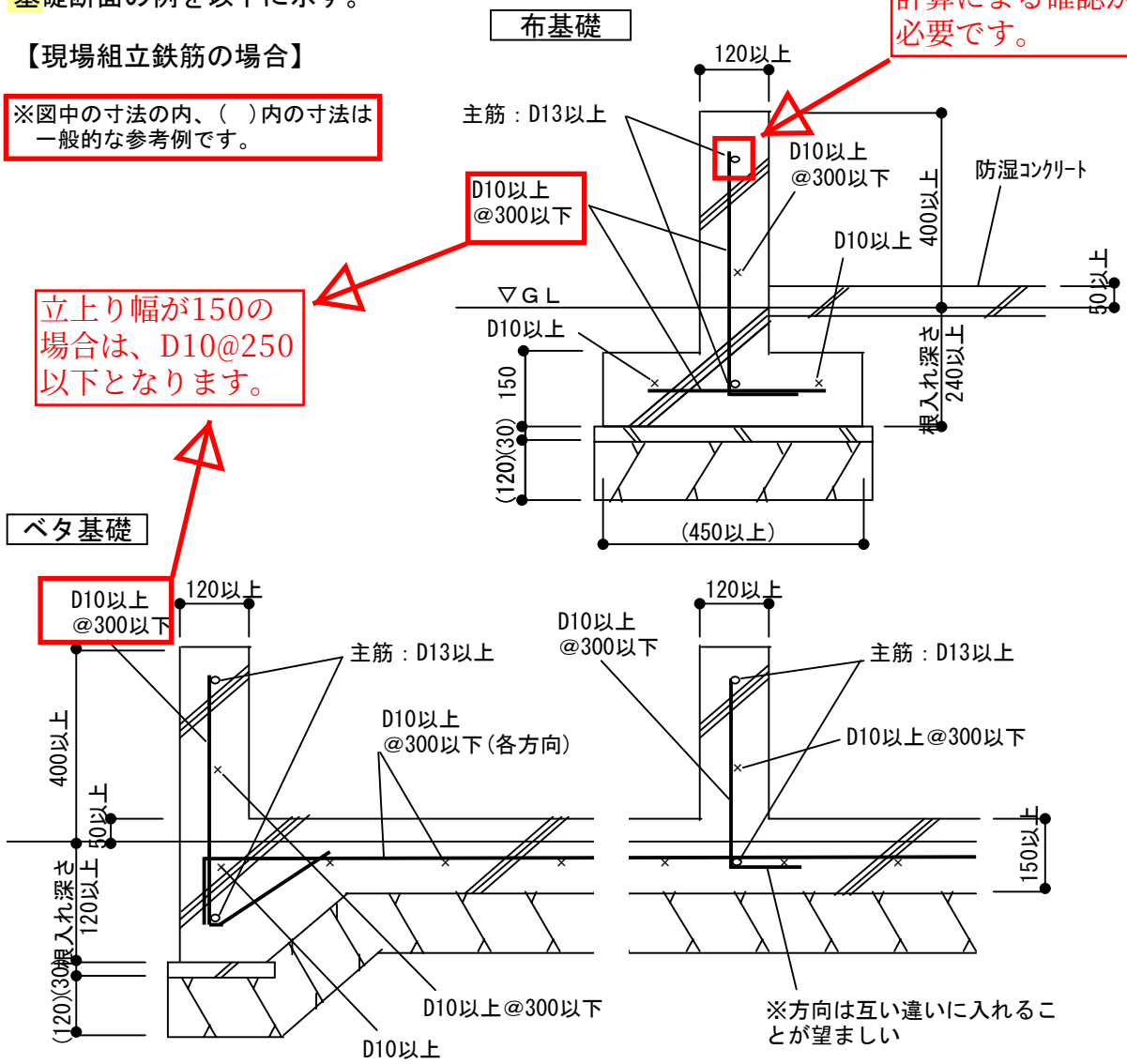
解説

基礎断面の例を以下に示す。

【現場組立鉄筋の場合】

※図中の寸法の内、（　）内の寸法は一般的な参考例です。

立上り幅が150の場合は、D10@250以下となります。



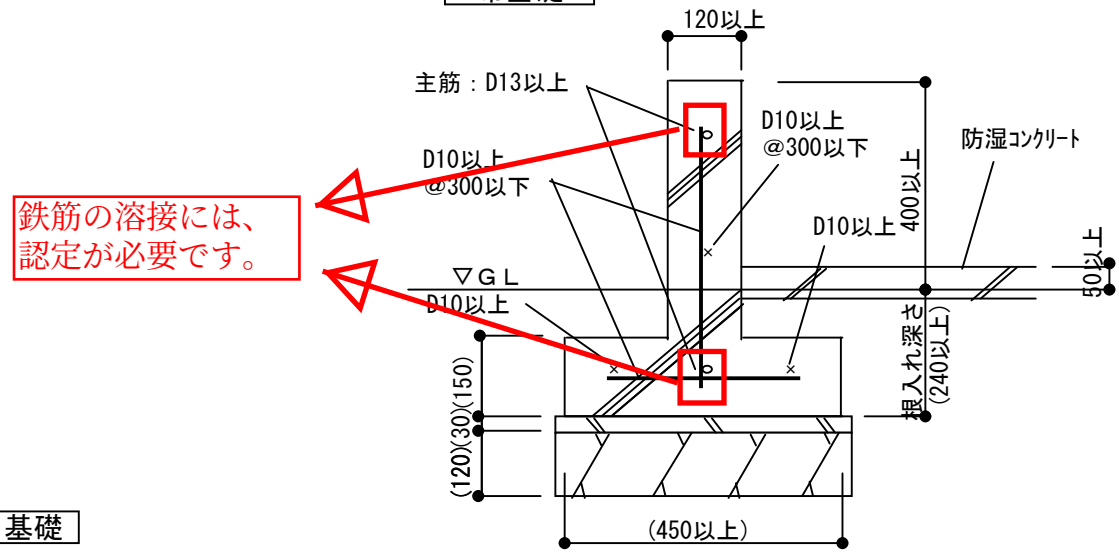
部位	基礎	No	1－2

解説

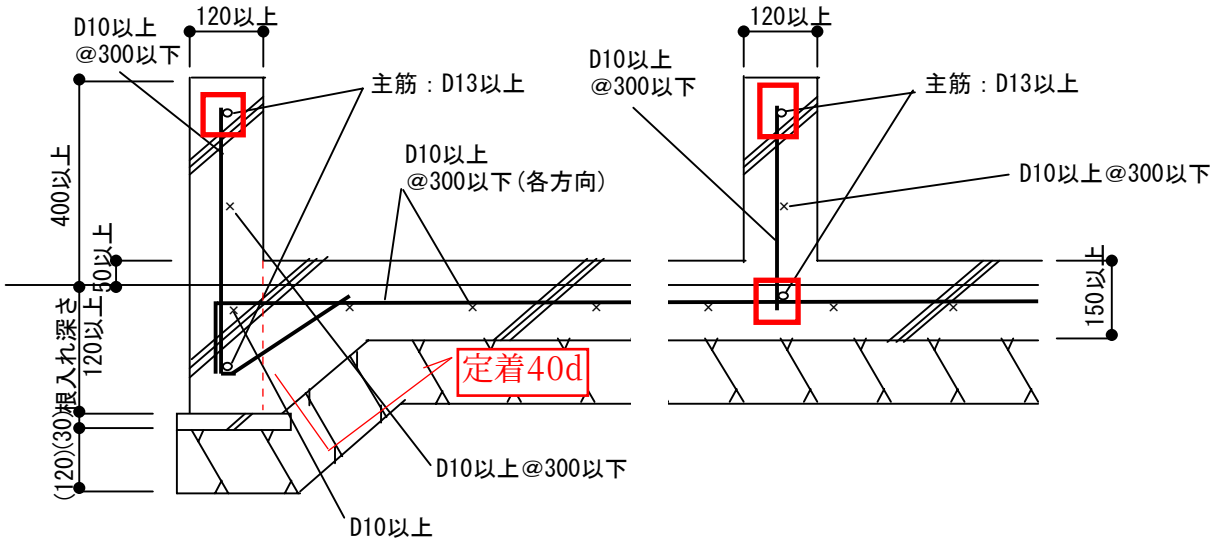
【ユニット鉄筋の場合】㈶日本建築センターの認定を受けている事

※図中の寸法の内、（　）内の寸法は
一般的な参考例です。

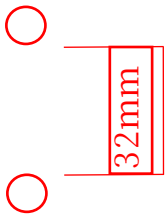
布基礎



ベタ基礎



主筋が２段筋になる場合は、適切なあき間隔を確保する。
Ｄ１３及びＤ１６の主筋あき間隔の最小値は３２mmとします。



部位	基礎	No	2

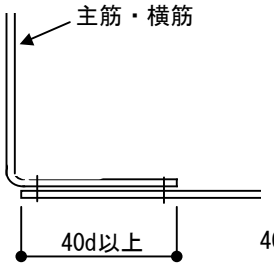
基準

鉄筋の継手および定着は、以下の解説図に基づき所定の長さを確保すること。

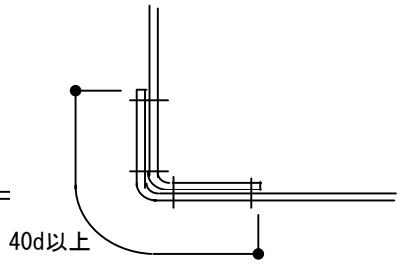
解説

【現場組立鉄筋の場合】

出隅・入隅(a)



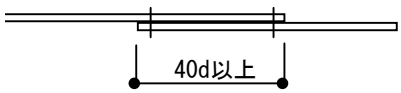
出隅・入隅(b)



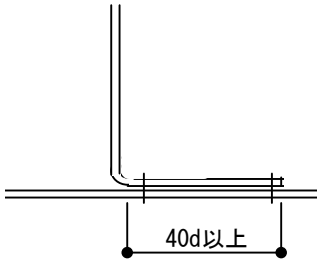
出隅・入隅の定着のとり方は、以下のいずれかとする
(a)一方の鉄筋を折り曲げ、他方向の鉄筋に４０ｄ以上重ね合わせる。
(b)両方の鉄筋を折り曲げて重ね合せ部分を４０ｄ以上とる。

なお、ユニット鉄筋に準じて補強筋を使う方法も可です。

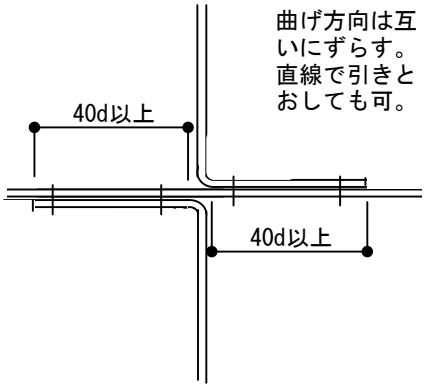
直線継手



Ｔ字部分



十字部分



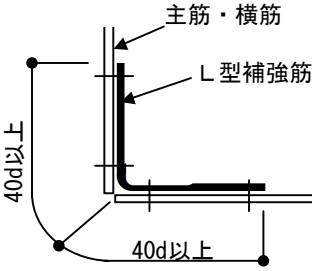
曲げ方向は互いにずらす。直線で引きとおしても可。

部位	基礎	No	3

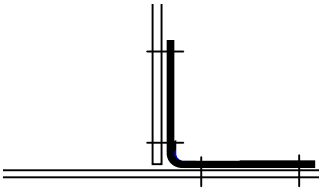
解説

【ユニット鉄筋の場合】

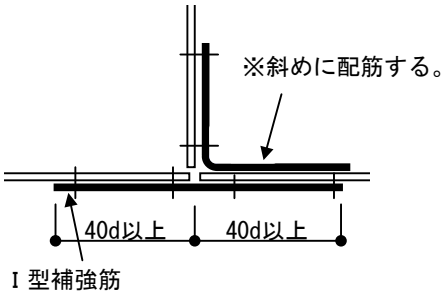
出隅・入隅



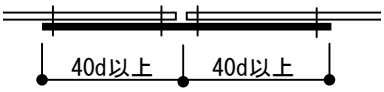
Ｔ字部分(a)



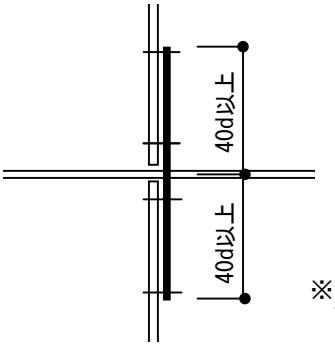
Ｔ字部分(b)



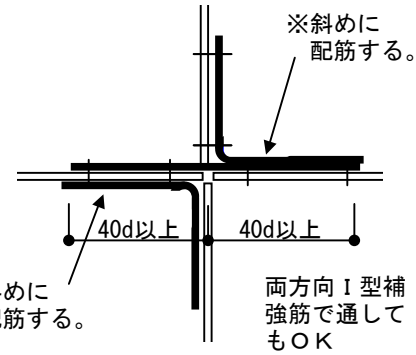
直線継手



十字部分(a)

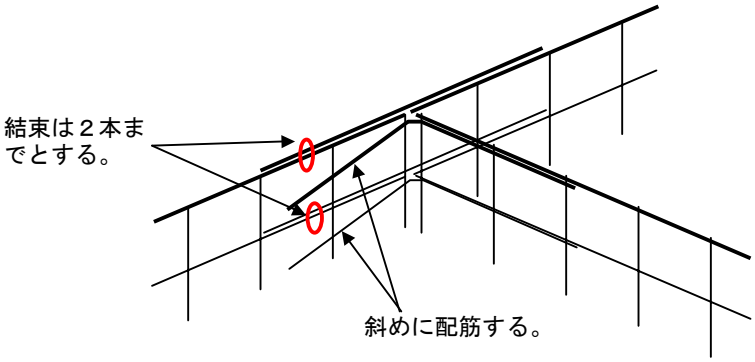


十字部分(b)



各部分におけるＬ型補強筋の寸法は出隅・入隅に準ずる。

※なお、上図Ｔ字部分(b)、十字部分(b)のように、鉄筋が３本以上重なる場合は、Ｌ型補強筋を斜めに配筋し、３本以上まとめて結束することは避ける。



◎現場組立鉄筋の場合も、同時に３本以上結束することは避ける。

部位	基礎	No	4

基準

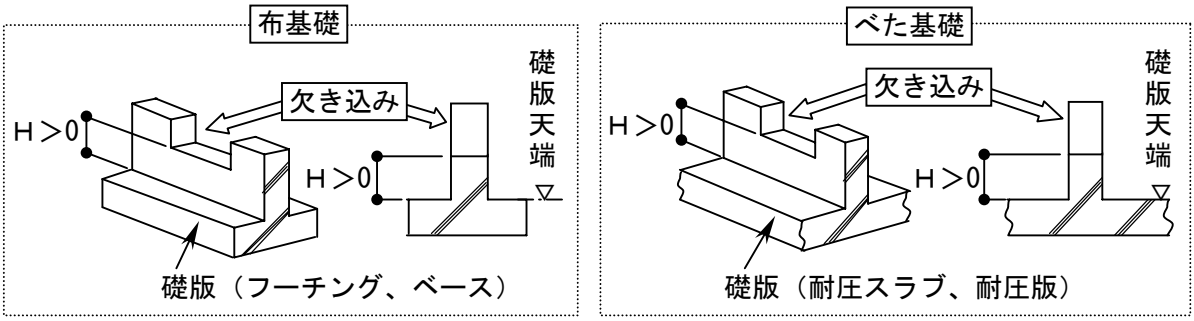
基礎立上り部の欠き込みは、柱の直下となる部分に設けてはならない。

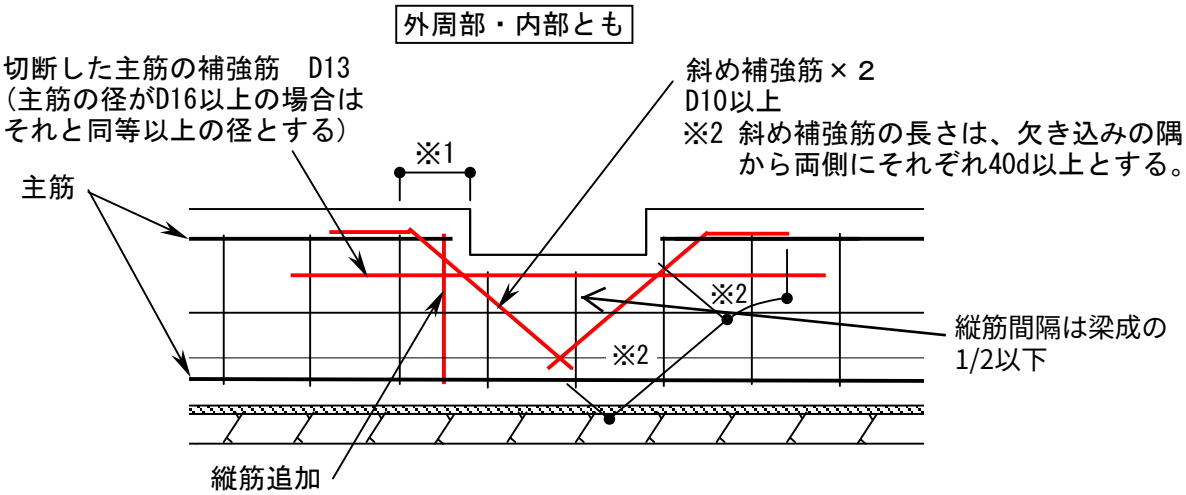
基礎立上り部に「欠き込み」を設けるため鉄筋を切断した部分には補強をおこなう。補強方法は以下による。

基礎立上り部（基礎梁）の「欠き込み」とは
　床下換気口、人通口、玄関・勝手口の出入口部分などの立上り部を欠き込んだ部分です。

解説

【欠き込みまでの高さ寸法Ｈがベース上端から0mm超の場合（Ｈ＞0）】

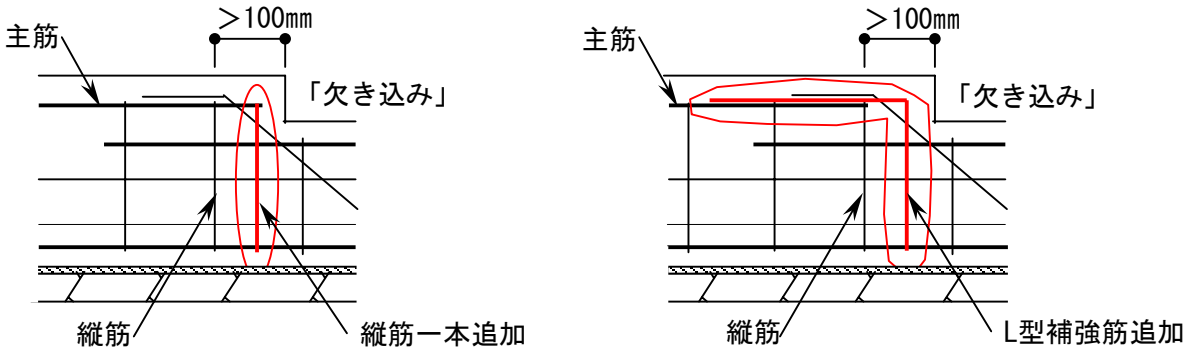




【※1 解説】欠き込みの端部から縦筋まで100mmを超える場合

①主筋が欠き込み付近まで伸びている場合、
　縦筋を１本追加する。

②主筋が縦筋のところで止まっている場合、
　Ｌ型の補強筋を入れる



部位	基礎	No	5

基準

立ち上がり部分は通りよく配筋し、適宜スペーサー等を用いてかぶり厚さを確保する。
布基礎の底盤の配筋、およびベタ基礎のスラブ筋の下にはスペーサーブロック等を設置し、かぶり厚さを６０㎜以上確保する。スペーサーブロック等の設置間隔は1000㎜内外（上限は1100㎜）とする。また、スペーサーブロックの代りに木片を使用してはならない。

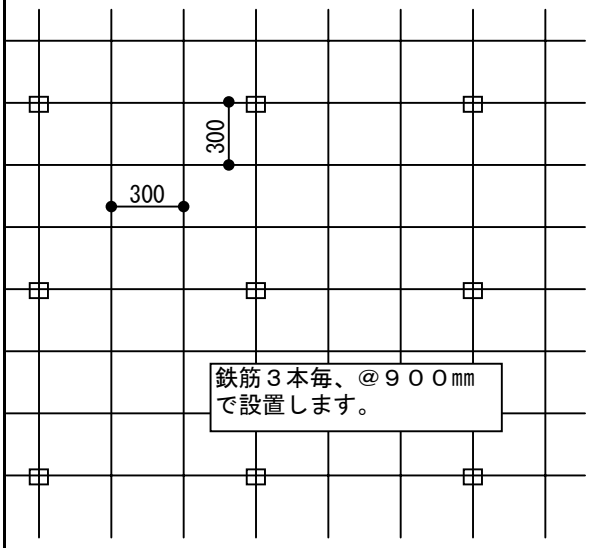
また、布基礎のベース部分においては、横方向（型枠との間）および天端のかぶり厚さも６０㎜以上確保する。

※計算書のかぶり厚さとする

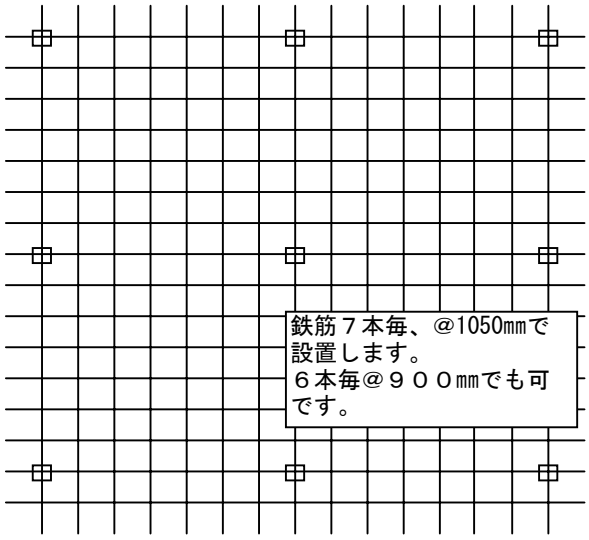
解説

◎スペーサーブロックの設置間隔「1000㎜内外」について
底板、またはスラブの配筋のピッチに合わせて設置します。
２５０@であれば４本毎、２００@であれば５本毎に１箇所設置してちょうど1000㎜となります。３００@や１５０@のときは下図によります。

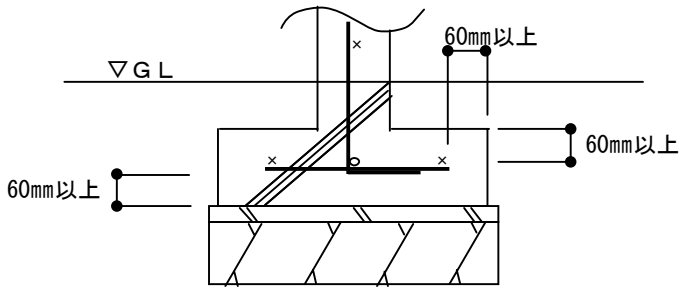
例１：スラブ筋@３００の場合



例２：スラブ筋@１５０の場合



◎布基礎ベース部分のかぶり厚さ



【スペーサーブロックの目的】
スペーサーブロックの設置は、所定のかぶり厚さを確保することが目的です。
上記のピッチを守っていても、鉄筋が部分的にたわんでいてかぶり厚さが確保できていない所があった場合は、適宜スペーサーブロックを追加して確保することが必要です。

部位	基礎	No	6

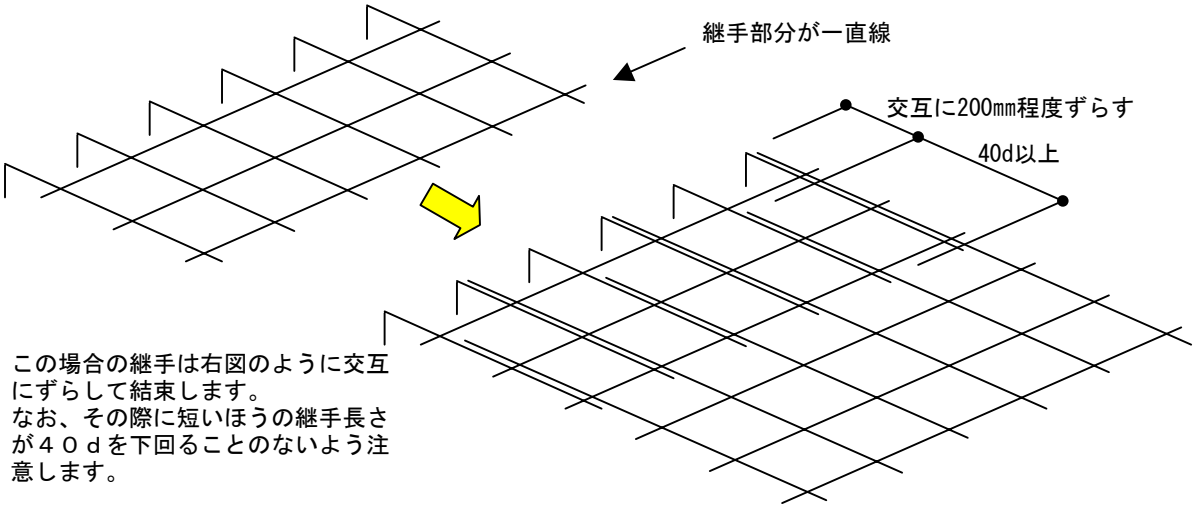
基準

ベタ基礎のスラブ筋の継手が隣り合う場合は「千鳥（うま）」に配置する。

解説

◎ユニット鉄筋の場合

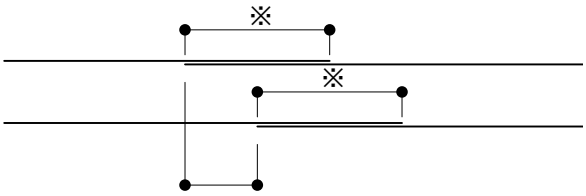
外周部のスラブユニットは、一般に継手部分が一直線に組み立てられています。



この場合の継手は右図のように交互にずらして結束します。
なお、その際に短いほうの継手長さが４０ｄを下回ることのないよう注意します。

◎現場組立鉄筋の場合

※：継手長さ40d以上



交互に200mm程度ずらす
（ずれが大きい分は可）

部位	基礎	No	7

基準

コンクリートは、ＪＩＳＡ５３０８（レディーミクストコンクリート）に規定されたレディーミクストコンクリートとする。
ｺﾝｸﾘｰﾄの設計基準強度は１８Ｎ／㎜^{2}以上、スランプは１８㎝以下とする。
呼び強度は設計基準強度に３～６を加え、さらに温度補正を加えた強度とする。
打設時に水を加えることは絶対におこなってはならない。
打設の際は、空隙・じゃんか等が生じないよう十分な突き、たたきをおこなう。
コンクリートの納入はＪＩＳ認定工場とすることが望ましい。
コンクリート打設後は、気温や日射、風雨等の状況に応じて養生シート、散水等により適切に養生する。
型枠の存置期間は、気温１５℃以上の場合は３日以上、５℃以上の場合は５日以上とする。

解説

温度補正の目安を以下に示します。

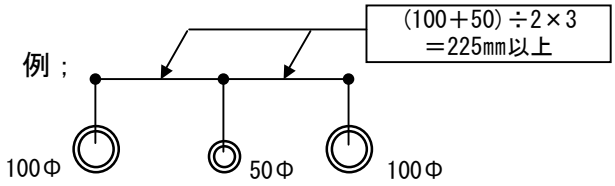
コンクリートの打ち込みから２８日後までの期間の予想平均気温（℃）	８以上１６未満	３以上８未満
品質基準強度	＋３	＋６

部位	基礎	No	8

基準

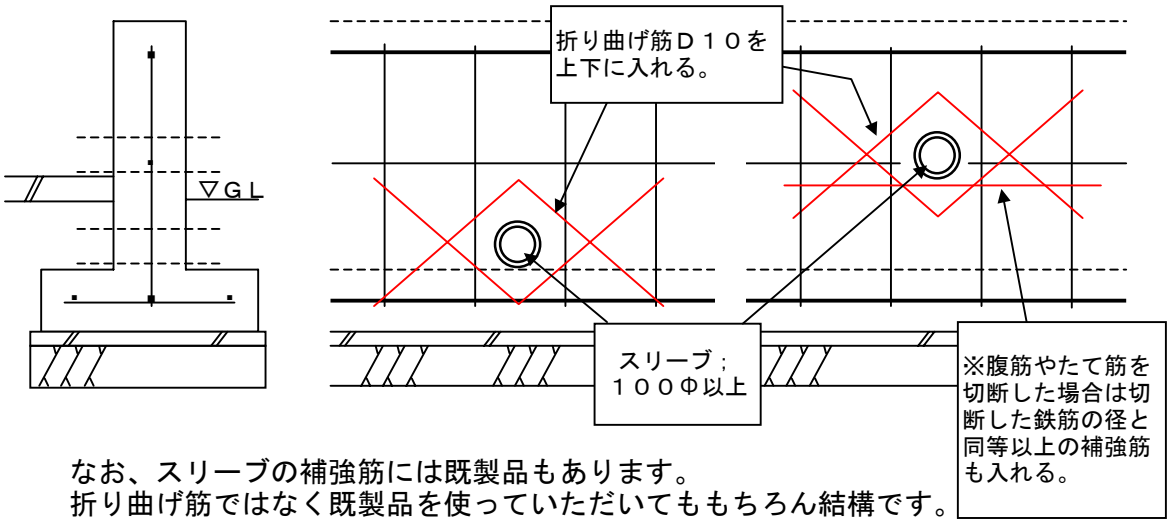
基礎にスリーブを設ける場合は、以下の解説に基づき補強筋を施工する。

また、スリーブが隣り合う場合の間隔はスリーブ径の３倍以上（径が異なる場合はそれぞれの径の平均値）とすることが望ましい。



解説

１．スリーブの直径が１００Φ以上の場合には補強筋を施工する。

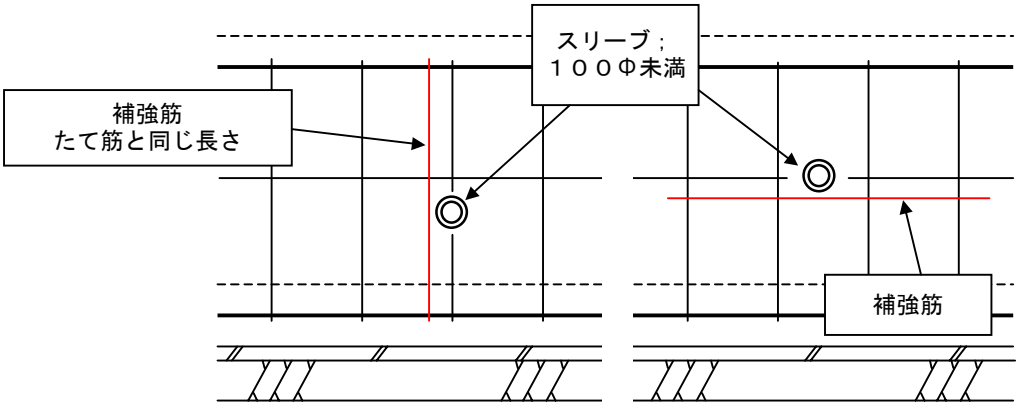


なお、スリーブの補強筋には既製品もあります。
折り曲げ筋ではなく既製品を使っていただいてももちろん結構です。

部位	基礎	No	9

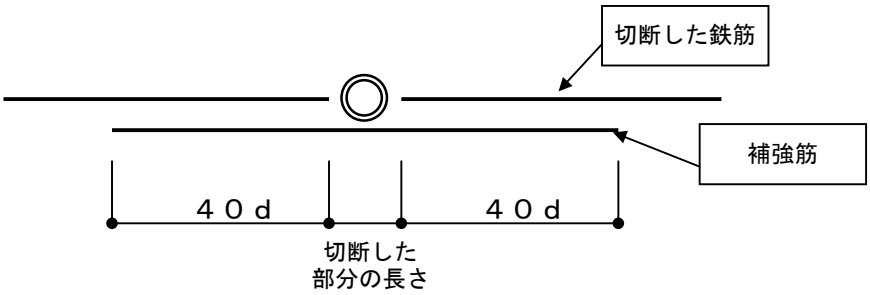
解説

３．スリーブの直径が１００Φ未満の場合でも、鉄筋を切断した場合に限り、
切断した鉄筋の径と同等以上の補強筋を入れる。



※切断した鉄筋に対する補強筋の長さの取り方

たて筋の場合は、他のたて筋の長さと同じ長さとします（上図参照）。
横方向の鉄筋の場合は、切断した部分の長さ＋両側４０ｄずつとします。
補強筋は切断した鉄筋の上下どちらに入れても構いません。



部位	基礎	No	10

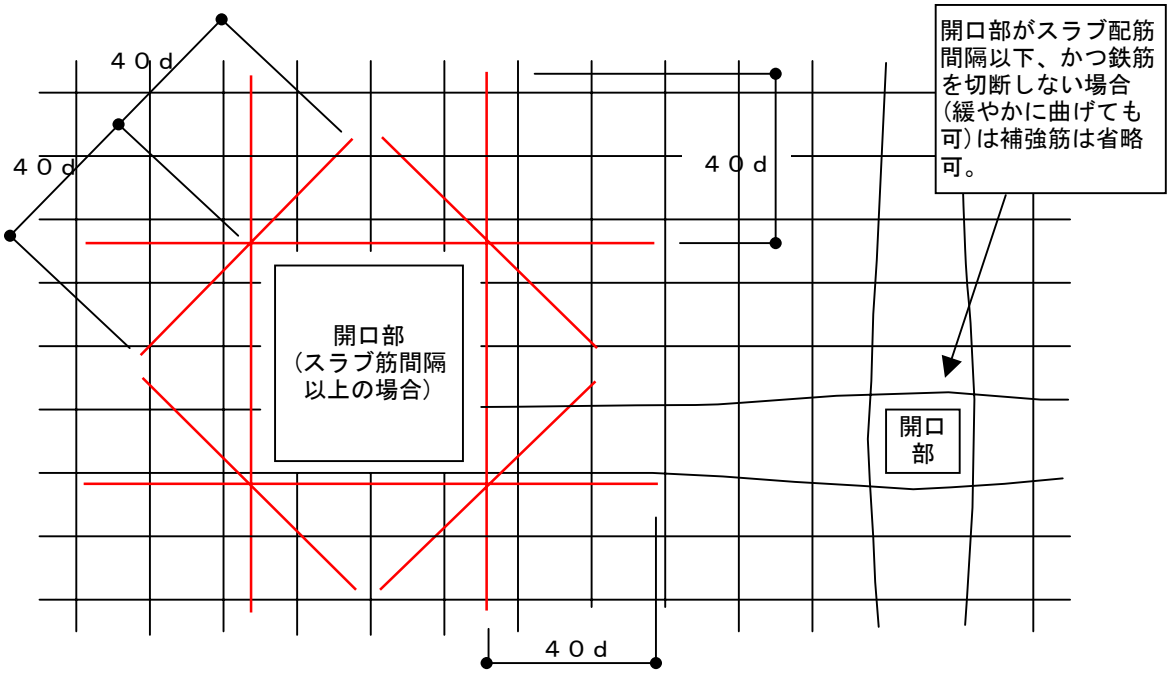
基準

べた基礎のスラブに開口部を設ける場合は、以下の解説に基づき補強筋を施工する。
ただし、開口部の大きさがスラブ配筋間隔以下で、鉄筋を緩やかに曲げることで開口を避けて配筋が出来る場合は補強筋は省略できます。

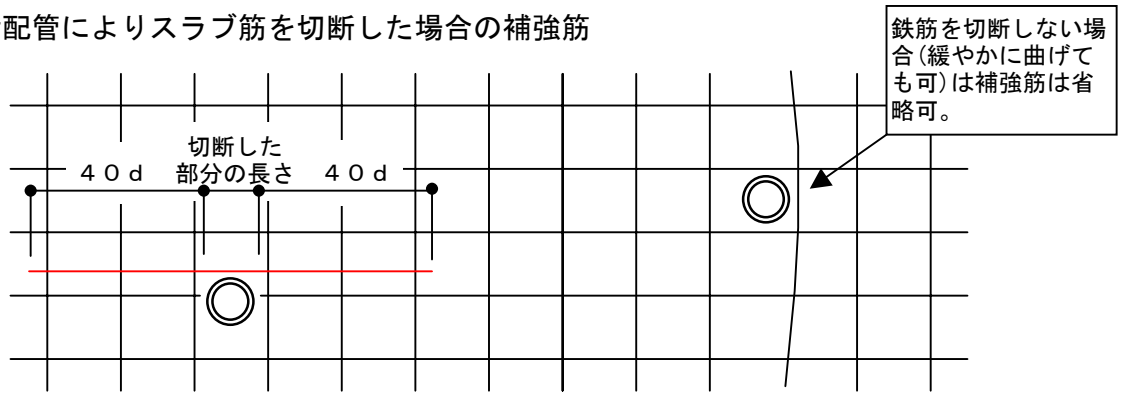
設備配管のスリーブ等によりスラブ筋を切断した場合は、切断された鉄筋と同寸以上の補強筋を施工する。

解説

べた基礎のスラブに開口部を設ける場合は、その周囲および四隅に補強筋を施工する。



設備配管によりスラブ筋を切断した場合の補強筋

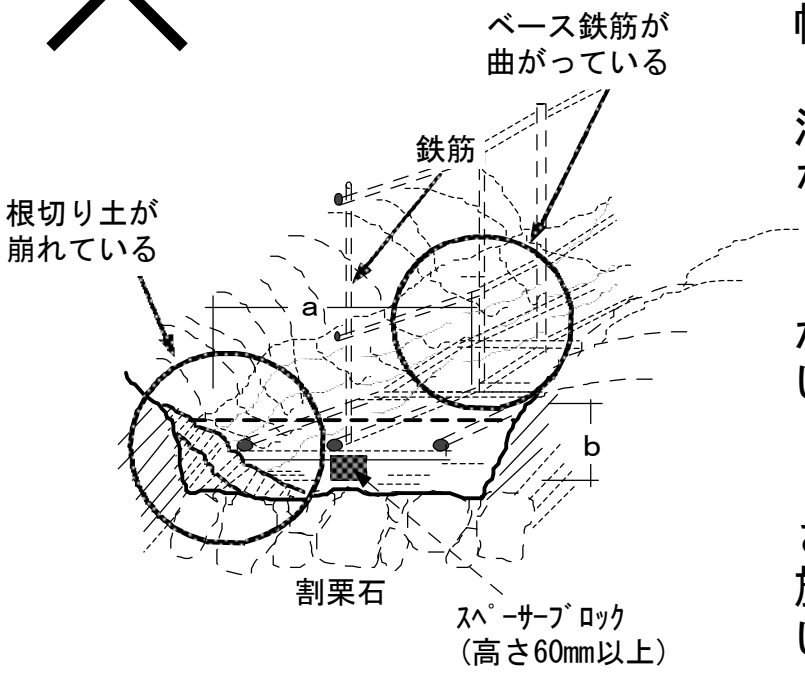


検査ポイント

○基礎配筋検査

○テーマ：ベース型枠設置

×

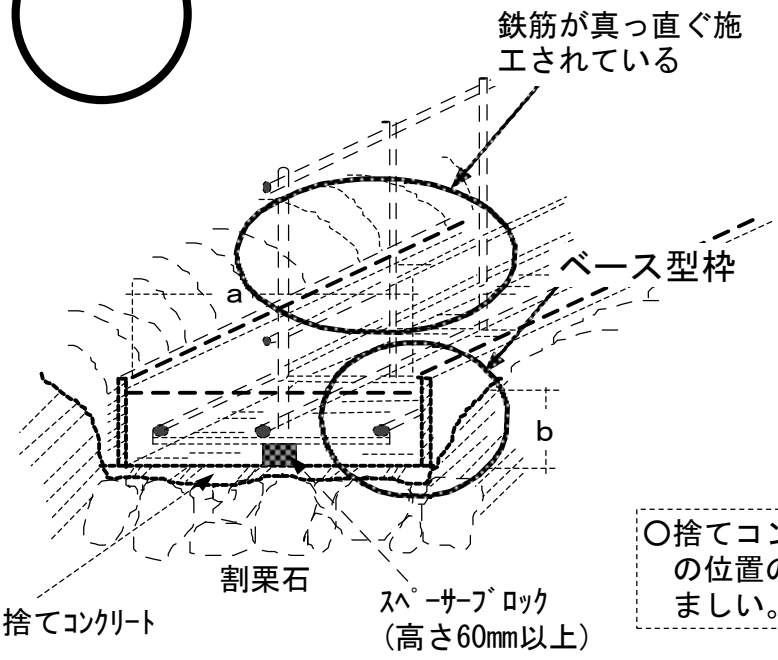


・根切りの土が崩れベースの幅（ａ）・厚さ（ｂ）が所定の寸法どおり取れていない。

・その為、鉄筋のかぶり厚が取れていない。

・ベース鉄筋が押されて真っ直ぐに施工されていない。

○



・ベースの幅（ａ）・厚さ（ｂ）が所定の寸法どおり確保できている。

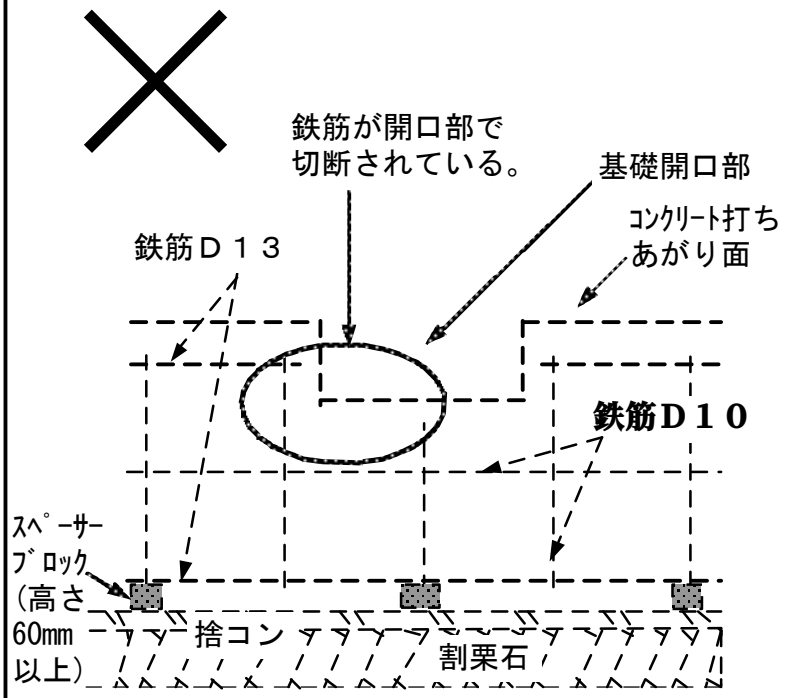
・配筋の通りも正確に確保できている。

○捨てコンクリートは配筋、型枠の位置の墨だしの為、施工が望ましい。

検査ポイント

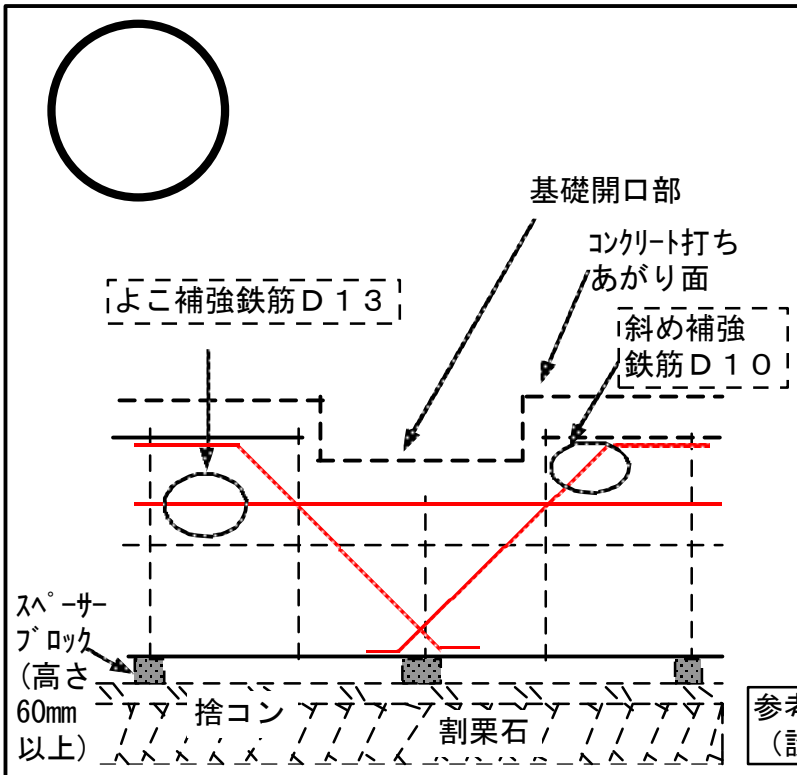
○基礎配筋検査

○テーマ：開口部補強筋



・基礎開口部の鉄筋が切断されたままになっている。（補強筋がない）

・開口部のｺｰﾅｰ部分に亀裂が入りやすい。（耐力が低下する）



・基礎開口部に補強筋が入れられている。

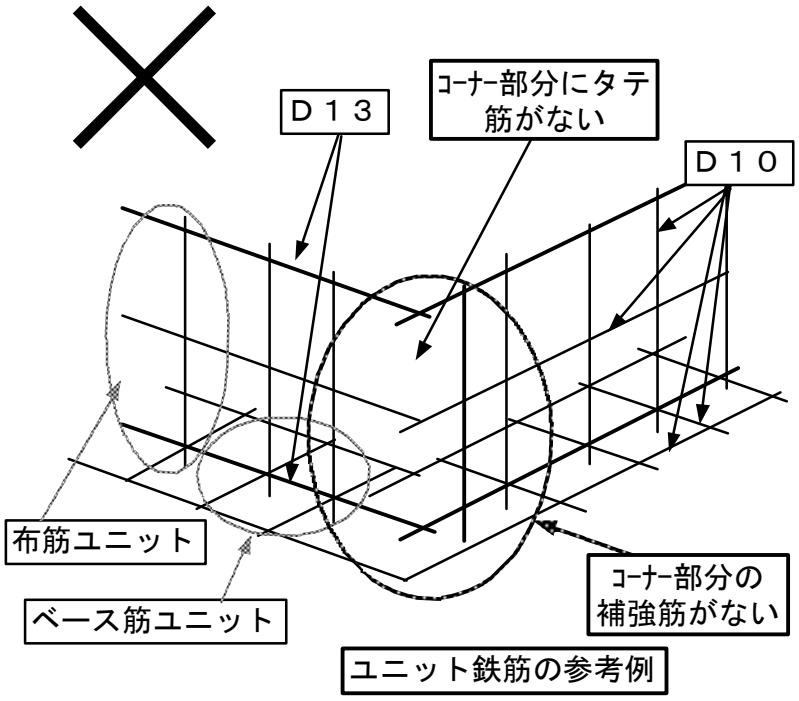
・開口部のｺｰﾅｰ部分に亀裂が入りにくい。（耐力が保たれる。）

参考：住宅金融公庫基準
（設計図面に準ずる）

検査ポイント

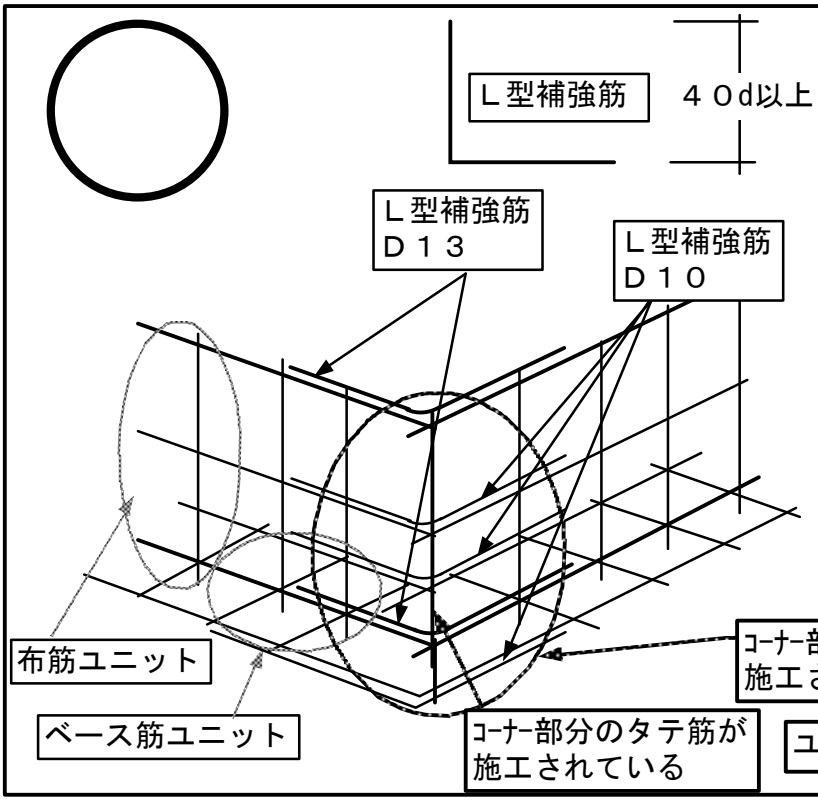
○基礎配筋検査

○テーマ：配筋接合部補強筋



・コーナー部分の配筋が単に突き付けで、補強筋による接続補強が行なわれていない。

・コーナー部の基礎耐力が落ちひび割れ等で、建物全体の構造強度に影響が出る。



・コーナー部分の配筋に、補強筋による接続補強が行なわれている。

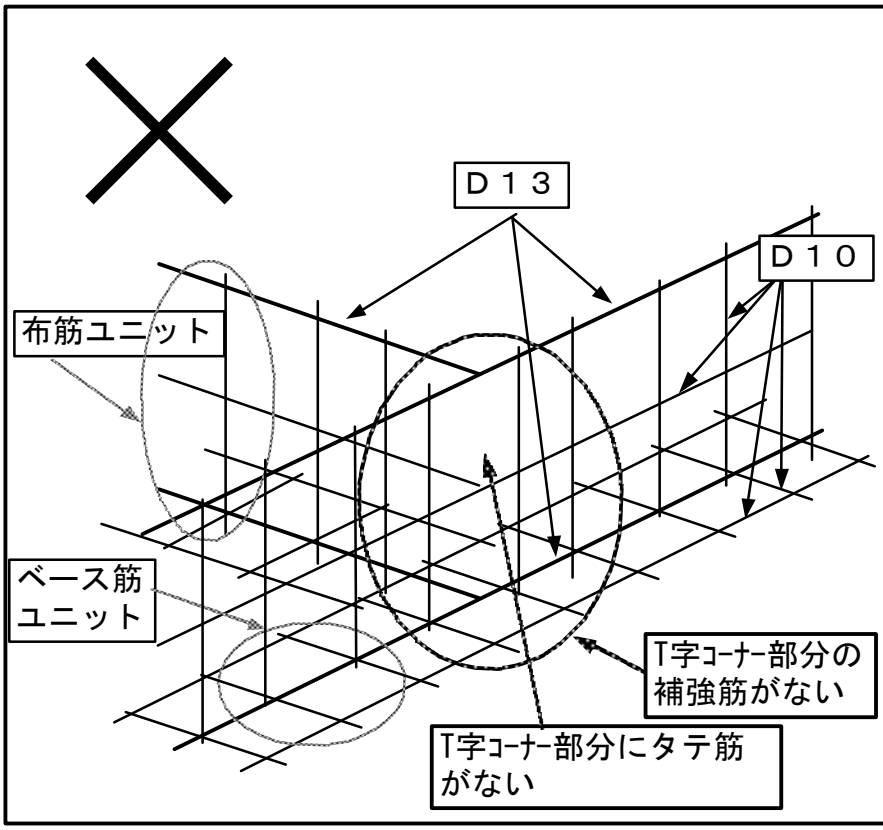
・コーナー部の基礎耐力が保たれる。

・ベタ基礎の場合も同様に補強して下さい。

検査ポイント

○基礎配筋検査

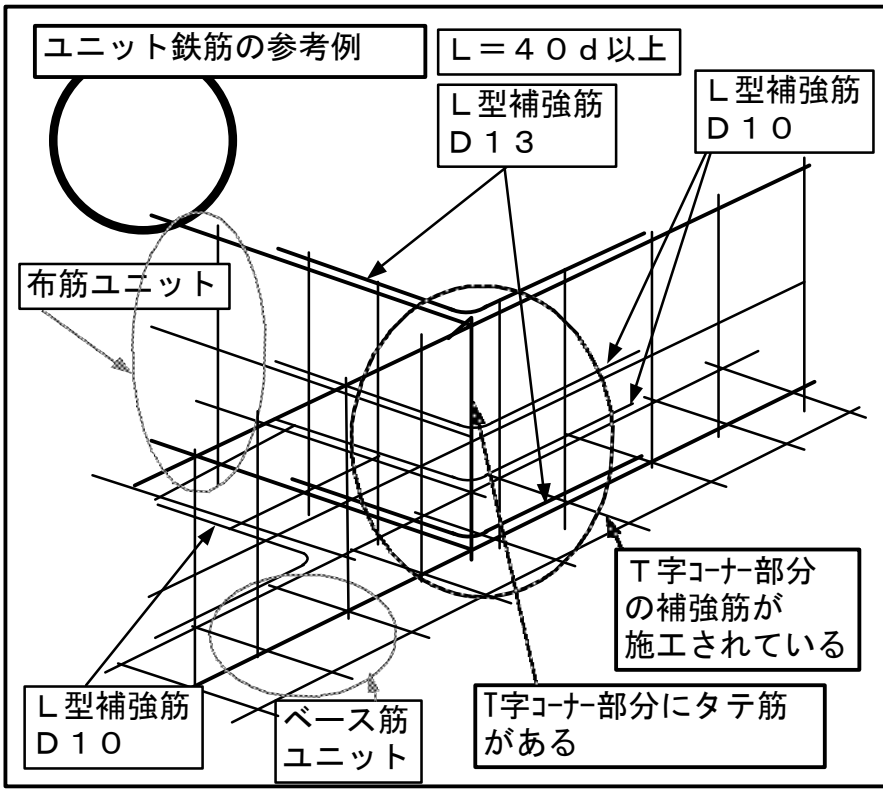
○テーマ：配筋接合部補強筋



・Ｔ字コーナー部分の配筋が単に突き付けで、補強筋による接続補強が行なわれていない。

・Ｔ字コーナー部の基礎耐力が落ちひび割れ等で、建物全体の構造強度に影響が出る。

ユニット鉄筋の参考例



・Ｔ字コーナー部分の配筋に、補強筋による接続補強が行なわれている。

・Ｔ字コーナー部の基礎耐力が保たれる。

・ベタ基礎の場合も同様に補強して下さい。

検査ポイント

○基礎配筋検査

○テーマ：かぶり厚さ

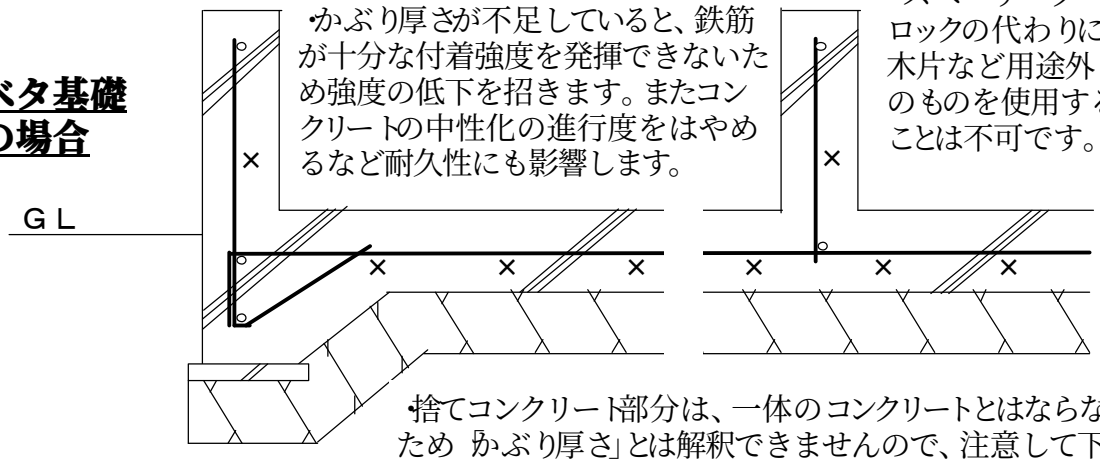
かぶり厚さを、確保するためのスペーサーブロックが入っていない。

・スペーサーブロックの高さがコンクリートのかぶり厚さになります。

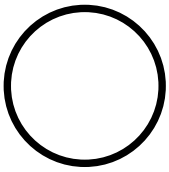
ベタ基礎の場合

・かぶり厚さが不足していると、鉄筋が十分な付着強度を発揮できないため強度の低下を招きます。またコンクリートの中性化の進行度をはやめるなど耐久性にも影響します。

・スペーサーブロックの代わりに木片など用途外のものを使用することは不可です。



・捨てコンクリート部分は、一体のコンクリートとはならないため「かぶり厚さ」とは解釈できませんので、注意して下さい。（建築基準法施行令 第79条にも記載があります）



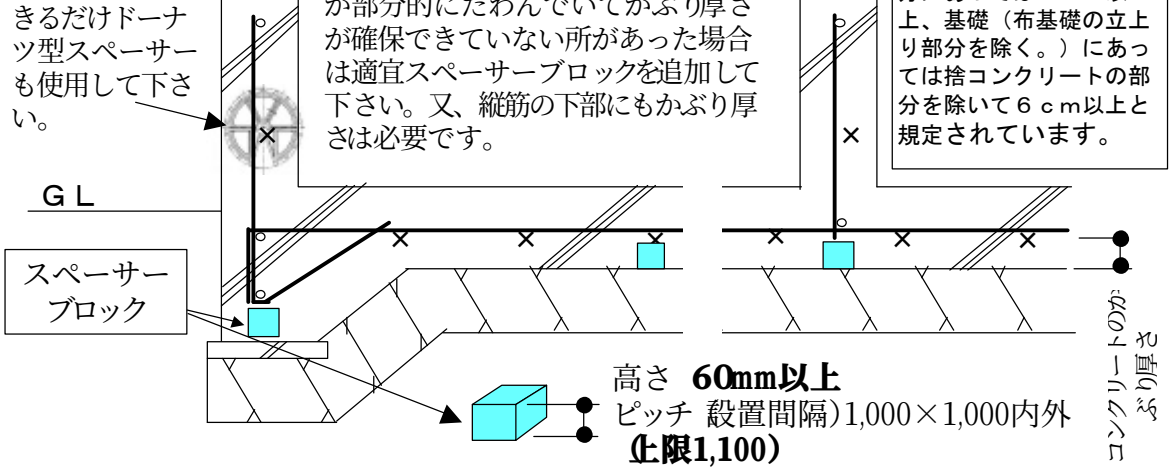
かぶり厚さを、確保するためのスペーサーブロックが入っている。

・下端筋（主筋）、底盤、又はスラブ筋などの配筋のピッチ（間隔）に合わせて設置します。

・立上がり部のかぶり厚を確保するために、できるだけドーナツ型スペーサーも使用して下さい。

・下記のピッチを守っていても、鉄筋が部分的にたわんでいてかぶり厚さが確保できていない所があった場合は適宜スペーサーブロックを追加して下さい。又、縦筋の下部にもかぶり厚さは必要です。

【解説】鉄筋のかぶり厚さは、建築基準法施行令第７９条で、耐力壁以外の壁又は床にあっては２ｃｍ以上、耐力壁、柱又は（はり）にあっては３ｃｍ以上、直接土に接する壁、柱、床若しくは（はり）又は布基礎の立上り部分にあっては４ｃｍ以上、基礎（布基礎の立上り部分を除く。）にあっては捨コンクリートの部分を除いて６ｃｍ以上と規定されています。



新潟地域型住宅協議会
ネイティブハウス

検査ポイント

○配筋検査

○テーマ：「段取り筋」の処理

×

・「段取り筋」をそのままにしてコンクリートを打設してしまうと「かぶり厚さ」が不足します。

・「段取り筋」とは、構造上必要でないが、鉄筋を組み立てる際に必要な鉄筋のことをいいます。

○

・図面に示されていない「段取り筋」や「組立て鉄筋」のうち、「所定のかぶり厚さ」が確保できないものは、鉄筋組み立てが完了した後、コンクート打設前に外して下さい。